

ゴルフの「距離の測り方」はこんなに進化した！

2026 年 8 月 24 日

ゴルフ同好会 古川

「グリーンまで何ヤードあるの？」——この疑問、実はゴルフの歴史とともに、答え方が大きく変わってきました。そこで、時代とともにどう変化したのか見ていきましょう。

* 初期：経験と目測の時代（～1900 年代前半）

ゴルフ黎明期では、プレーヤーは以下で距離を判断していました。

キャディの経験 ・ コースの目印 ・ 歩測（歩数で測る）・ 地形の感覚

当時は正確なヤーデージ表示はほぼなく、熟練者の「感覚」が重要でした。



* ヤーデージ杭・スプリンクラーヘッドの時代（1950～1990 年代）

戦後、多くのコースで距離表示が整備されます。

代表例：150 ヤード杭・100 ヤード杭・フェアウェイの距離板・スプリンクラーヘッドの刻印

これにより、プレーヤーは「杭までの距離+自分のボール位置」から残り距離を計算するようになりました。



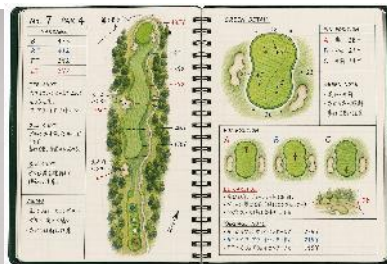
* レーザー距離計の登場（1990 年代後半～）

光学技術の進歩で、ピンまで直接測れるようになるレーザー距離計が一般ゴルファーにも手が届く価格で普及し始めます。旗や木などの対象物にレーザーを当てるだけで、瞬時に正確な距離が表示されるこの機器は、まさに革命的でした。

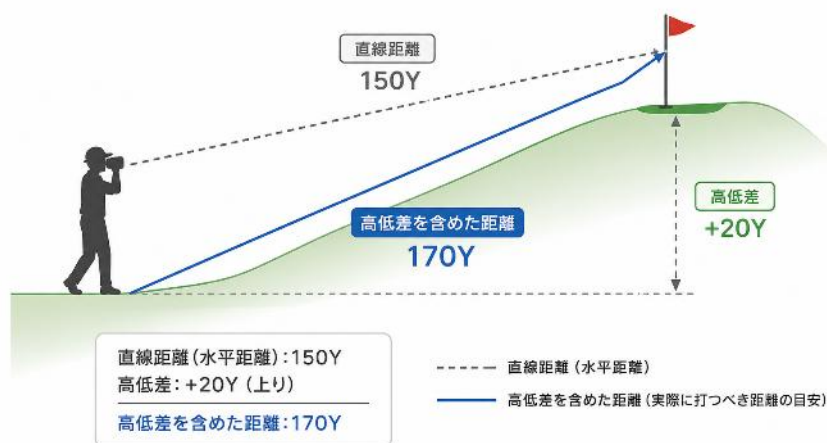
「目測で 170 ヤードと思ったら、実は 155 ヤードだった」——そんな誤差によるミスショットが大幅に減り、スコアアップにつながるとして、多くのアマチュアゴルファーが飛びつきました。ただし、プロの競技では長らく使用が禁止されていました。プロゴルフの世界では「距離を読む能力もスキルのうち」という考え方があったためです（現在は条件付きで使用可能な大会もあります）。プロやキャディは大会前の練習ラウンドで、ピン位置候補・バンカーまでの距離・池越え距離・ランディングエリアを細かく測定し、ヤーデージブックへ記録します。競技中に距離計が使えなくても、事前に集めたデータを活用します。



レーザー距離計



ヤーデージブック



レーザー距離計の高低差を含めた距離の測定イメージ

* GPS ゴルフナビ時代（2000 年代～現在）

スマートフォンと GPS 技術の発達により、GPS ゴルフナビが登場します。これはレーザー距離計とは異なり、コース全体の俯瞰図をリアルタイムで表示しながら、グリーンまでの距離・バンカーや池までの距離を同時に確認できる優れたものです。ポケットに入るサイズの GPS ナビや、スマートウォッチ型の GPS 距離計も登場し、手首を見るだけで距離がわかる時代になりました。初心者でも直感的に使えるため、「距離の把握」というゴルフの大きなハードルがぐっと下がったといえます。



* 最新技術——AI がクラブ選びまでアドバイスする時代

さらに最近では、GPS や距離計と**AI（人工知能）**が組み合わさった新世代のツールが登場しています。距離だけでなく、風速・風向き・高低差・気温・自分の過去のショットデータなどを総合的に分析し、「今日のあなたには 6 番アイアンがおすすめ」とまでアドバイスしてくれるアプリやデバイスも登場。距離を「測る」から「判断する」ステージへと進化しています。

プロゴルファーの世界でも、練習ラウンドでのデータ収集にこうしたテクノロジーを活用するケースが増えています。ただし公式競技での使用には依然として制限があり、プロは今もキャディとの綿密な「会話」で距離と戦略を決めています。

* まとめ：道具は進化しても、楽しさは変わらない

時代	主な距離把握の方法
1900 年代前半	目測・経験・キャディ
1950～1990 年代	ヤード表・コースガイド
1990 年代後半～	レーザー距離計
2010 年代～	GPS ナビ・スマートウォッチ
現在～	AI 搭載アプリ・総合分析ツール

ゴルフにおける距離の把握は、人間の感覚から始まり、テクノロジーの力を借りながら急速に進化してきました。アマチュアゴルファーは、まず GPS 距離計やレーザー距離計を気軽に活用してみるのがおすすめです。正確な距離がわかるだけで、クラブ選びに自信が持てて、ゴルフがもっと楽しくなりますよ！